

天理教

創世記
教理淵源

神代古記

14

15

本書出版の由來

本書は天理教祖中山美支子に、天理王命の神憑ありて宣説せられたる者にして、天理教會中唯一秘藏の書なり。故に假令數千の金を投じ身命と斯道の犠牲に供するも容易に窺ふ事を得ぬ大秘密の書は實に此書なり。

予は明治卅一年の夏の頃より、大阪府堺市綾之町にある神道天理塚支教會所に入り、會長平野氏の薫陶を受る事久く、遂に月に一回宛大和の本部に到り高井辻諸井増井板倉梅谷其他の諸先生に就て教理を聽さる、事九回に及

一

二

び最後に予は神の御心に合ふものなりとて本席飯降伊藏氏より手振の授を受け、神道管長稻葉正邦子より教導職に任命せられ、爾來斯道擴張の爲に布教する事茲に七年の星霜と經て這般はしなくも神代古記と云ふ秘書を發見し一讀するに古今未聞の事多く同時に疑問百出し實に了解に苦む事多く、斯道の先生に就て質すも毫も要領と得ず止と得ず活版に附して大方識者の判断と請はんと欲す。本書出版に付ては天理教本部より干涉やら示談やら結局出版中止の請求もありたれど、予は燈を燃して斗の下に

ふ、格言を引て之に對へ遂に即ち出版する事とはなれり
本書の文章は神祿直傳の儘と筆録せる者にして、毫も人
間の手を加へたる者にあらずと云ふ。

明治卅六年六月

神道天理教
堺支教會所派員

教導職 真木天涯謹識



天理教創世記 神代古記

教理淵源

此世の始
は泥海と
る世界な
り

月日の相
駭

神様が御教祖に祈憑ありて、即ち御教祖の口を籍
て仰せらるゝは、此世の原始は茫々漠々として、
山川草木人類蟲魚一切何者もなく所謂泥海泥世界
なりき、其中に神云ふは月日兩人居たばかり、
月云は國常立命云ふ神様なり、日云は面足
命云神様なり、月様が先づ出で、國常を堅め日
様に御相談成さるゝは、怎麼も茫々たる大海の中
に月日兩人のみ居たばかりでは何人も神様云工
尊崇して呉れる者がない、其では自由自在神變不

月日二人
のみでは
娛かかな
い

人間を造
て陽氣聚
なしよう

可思議力を有つ吾々兩人も、數万人の者共より、
ゑらき人よ勿体ない有難と崇められてこそ、此世
に住で居る甲斐もあれ、視て稱讃て呉れる者のな
くては如何に威力を現はしてみても、何となくヒ
ヨーンの抜たものなれば、如し今より御許に兩人
心を合せて幾多の人間を産出、其人間の体内に吾
々兩人が入込で守護をせば、人間の身が自由自在
に活動して、種々の活劇悲劇を演じ、吾々は天よ
り其を見澄て居れば随分ようきなものであらふこ
仰せありければ、女神の日様は尊命御尤の次第妾
争で異存のムませふ、宜く速に人間の製造に取掛

人間を造
る材料を
さし出す

先始に銀
魚を見出
す

一尾の白
蛇あり

ませふこ、彌々協議一決して其準備をぞ急ぎ給ふ
借て物を造には必ず其材料なかる可らず、空中に
樓閣は到底築造する事は覺束なき事である、今月
日、人間を造にも材料なくては不可能の事なり、
即ち人間の五體を造べきごうぐひな、たを選擇せ
んものご、廣き世界を見渡し給へ、銀魚ご云ふ魚
の海中に游泳るあり、「此魚人魚ごも云」其形貌を
見に、今の人間の面に似て、鱗はなくして肌膚は
亦人間に異ならず、
次に復眼を放て世界を見渡し給へ、一尾の白蛇あり
人間の肌膚にして鱗なし、名をミご云ふ、此二人

三

銀魚ご白
蛇月日の
命を拒む

汝等兩人
を世界一
の神をし
て祭らし
む

の者天性正直義なるを以て、此のすがたを以て
人間を製作するタチナハシロご爲さんご云ふ、お
覺召にて、汝等兩人の身體を吾等夫婦の者に打任
せよご、仰せありたれご二人共非常に忌嫌て再三
お辭み申上たれご、月日御夫婦は容易に之を許し
給ずして、且つ慰て仰せあるは、今汝等兩人吾等
の命を聞き、其に依て世界をこしらへ、人間を生
み、ちやんご世界の秩序が立て來たならば、汝等
兩人こそ世界中第一の神として人の尊崇を受ける
様に、且つは榮譽榮華如意圓滿ならしめん程に、
曲て我等の命に隨へよご無理に承知をさせて、茲

四

人間の魂
は體なり

男子の男
根は何物
である

に人間を産出するたねなはしろの役目は定りぬ、
一物あれば必ず活用するの必要あり、假令人間を
こしらへるも、之が身體を活動する、即ち靈魂な
かる可すこて、其靈魂になる可き物を探索し給ひ
ければ、太海の中に九億九萬九千九百九十九ひき
の鱷あり渠には口髭も生ているし人間の靈魂とす
るには至極適當なりと仰せられて、種々に因果を
含て承知させ、茲に人間靈魂となるべき物の役割
は定ぬ

更に戌亥の方を見渡し給へば、シヤナホコ云ふ
魚あり、勢鋭く能くシヤナバルが故に、男子の男

五

女子の女
門は何で
ある

鯉の進退
は自由な
り

根ご成に適當なりとお覺召て、汝も亦人間なり神
ごして尊崇を受けさす程に、宜く我命に隨て人間
製造の一の道具雛形になれよと説諭されて、遂に
御尊命に服しける

六

更に復辰巳の方を見渡し給は海面に身を浮べ、背
部を太陽に煖て面白げに遊で居る龜あり、此物の
身體を調て見るご極て柔な所あれば、又極て堅き
皮もあり、そこで柔かなる所は婦人の陰部ご成し
剛き所は人間の皮繋ご成し給ふ
更に復卯の方角を見渡し給は、鰻の遊び戯るあり
此物勢強く、首を以て進み、尻を以て退き、進退

自由の利所より、人間が飲食を爲し、又大小便の
通じを爲す、即ちのみくひでいりの守護に定め給

人間呼吸
吹別守

風ぐちを
あり

更に復未申の方を見渡し給ば、鰈云ふ魚あり、
此物身うすくして、アオゲば能く風を含む、茲を
以て人間息吹別の守護と定め給ふ
更に復酉の方角を見渡し給ばクログナナのうごめ
くあり此物の身體を調べみるに中々強勢にして、
引張ても切れぬ故、食物粒氣凡て地中より生へ出
る物の引出の守護と決め給ふ
更に復丑寅の方を見渡し給へば鰻云ふ魚あり、

七

腹の太き
魚あり

此物は常に大食を好む故に腹は便々として太鼓の
如にふくれてあり、人間之を食する時は直に其の
毒に中る物なるが故に、人間生る時親子胎内の縁
を切り人間出直の時(死する時を云ふ)呼吸の根
を切る守護とす

八

北枕なり

以上人間造る道具雛形出来あがりたるを以て、シ
ヤナホユを以て男根となし、其をギイ様即ち銀魚
に仕込て國常立命の魂入込で男の種となり、ミイ
様即白グナナニ龜を陰門として仕込、其に面足命
の魂入込で女の種となり、現今御本部の甘露臺の
ある所を、オビヤの場所と定め、ミイ様は北枕に

南無と云ふ二字の起りし元の因縁

人間と云ふ名の起りし元の因縁

寢て、ギ一様と交合成して三日三夜の中に九億九万九千九百九十九人の人数を男女二人宛南無々々云ひて宿し込み給たるなり、「今神佛の御名を唱るに必ず南無の二字を冠らすは此理に依てなり、南無は夫婦の事なり、夫婦は天地の事なり、南無は日月の事なり、月日は夫婦の事なり云々」「人間と云ふ名を附た理は、人間の雛形種苗代と成就たる魚を人魚と名づくるが故に人間と云ふ名起れるなり、世界は廣く學者澤山あれど、人間と云ふ名の起る元の因縁を知たる者はあるまいと、

東西南北と云ふ名の起りし元の因縁

此世と云ふ字の元のなこり

教祖は常に仰せられ升た東西南北と云ふ名を付た、元の因縁は、ギ一様とミ一様と始め交合して人間宿込の時、ミ一様は北枕にして西向に成給ひたるが故に北と西の名が出來、ギ一様は先に起て東向に成給たる理を以て東と云名が出來、ミ一様はあごより起て南向に成給たるを以て南と云名が出來たるなりと仰せらる、此世と云は、月様は男神にして日様は女神様ヒ一上に在て位尊く、而て月は夜を照し、人間宿込の時、夜は九ツ時、今の十二時頃より交合を始め給たる理を以て此世とは云しなりや仰せらる

以上は御教祖に神様が入込で、此世の始り人間造
る道具雛形の概略を御話成されたる者なり、更に
又御教祖の口を藉て神様の仰せられけるは、
人間は神の子なり、人間の身は神の借物なり、其
人間を守護する神は、一に國常立命、二に面足命
あり、此二柱の神は元の神元の親なり、後八柱の
神は人間造へるには道具雛形に使用せし者なり、
一に先國常立命は天に在ては月様と現れて世界を
た照し成され、人間身の中では、眼脰體水氣の御
守護にて、方角は子の方を司り給ふ
此神様は男體にして一頭一尾の大龍なり、此世國

常を見定固め給たる理を以て、國見定命とも申奉
る、人間宿込の時、即ち面足命と交合の御時男根
を以て上から突の理を以て月様ともいふ、交合の
濟だ後月様が先に立つが故に、月日といふ、日月
とは言はぬ、又三十日を總括して一月といふ、故
に女は如何に毎日朝未明より働ても、其効は皆男
に歸するなり
天竺にては釋迦如來と現れ給て、七千有餘の經卷
八万四千の法門を説給ふ、復文珠菩薩と現て衆生
を濟度し給ふ
二柱面足命は天に在ては日輪様と現れ、方角は午

而足命の御守護

全御正體

面足と云

名の起る

理

日輪と云

三理

邪見と云
字破の理

の方を司り、人間身の中にては、煖みの守護世界
では火一切を守り給ふ、

此神様は女體にして、御形體は十二頭三尾三劍の
大蛇なり

此神様は人間宿し込の後日日身が重く成故にをも
たるの命といふ

又日日天理といふ理を世界中にまわす故に日輪
「輪といふ字はわと云訓あり、わはまはる物なり」

様といふ
大蛇の尾に三の劍あるが故に、悪性の女をジャケ
ンな人と云「蛇劍と邪見と相通ず」

十二月の
起る因縁

一月十二
さきに分
れるの理

十二の干
支と同断
なり

彌陀如來
其他の佛
に化身す

一年十二月に割あてたるは、此神様に十二の頭あ
りて、一の頭が一月宛交代して十二通に守護する
が故に、十二月と分れたるなり

又一日十二時に、「昔は二時間を一時とす、故に二
十四時間を十二時とはいふなり」分れたるの理は、
大蛇の十二の頭が一と時に一ツ宛まはりて世界を
守護するが故なり

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二の干支の分れた
るも右十二さきの理に異ならず

佛法にては三途の「三尊の誤欠」彌陀如來と現れ、
心澄たる理を以て勢至菩薩ともいふ、復十一面觀

光分云
の理

國狹土命
の御守護
御正體は
龜なり
女の陰門
の理

音にも現る、十一面観音には十一の顔ありて更に
彌陀一佛を頂上に戴き都合顔が十二あり、此も世
界を十二通に守護するの理なり
以上二柱の神様は、此世の元の親人間の實の親様
なり、人間身の中にては、メクミミスイキ、五分
と五分と過不及なき様に御守護下さるか故に、物
の不足なきを十分と云慣せるなり
三柱目國狹土命は、人間身の中では皮肉繋合の御
守護下され、世界では金銀縁談親子主従兄弟凡て
繋合の御守護を下さる、方角は辰巳を司り給ふ、
御正體は龜なり、龜を以て女の陰門と成す、其の

昔の婦人
と今の婦
人の比較

身に化身
了
月護命の
御守護

カメノコと云理を以て女の陰門をオメコと名附し
なり「昔の女は龜の甲を以て製したる櫛笄を指し
たるを以て至て柔和なりし、其は龜と云ものは、
首を出て居ても人の來る時は直に首を引込るが故
なり」今の女は之に反して來人杯ある時は態と差
出て口を利き頭を振立て良人の云事は中々聽入れ
ぬ、其は馬の骨や牛の角を櫛笄として頭に頂くか
らである
此神様は佛法にては、普賢菩薩達磨尊者、拏才、
縁結の神、黄檗山と現れ給ふ
四柱目月護命は天に在ては破軍星と成り、人間身

御正体

の中では身骨立突張の御守護、世界では家庫草木
凡て立突張の御守護、方角は戌亥を司り給ふ、
御正體はシヤナホコといふ魚なり、シヤナホコは
突はりの勢強き故に男根に仕込、男女交合の時
は上より突ぶ故に月讀見命と名附
天照大神八幡大菩薩は此神様の化身なり
五柱目雲よけの命、天に在ては朝の明神「晨の明
星欠」の星なり、人間身の中では飲食出入の御守
護、世界では夜露の上下を守り、方角は卯の方を
司り給ふ「飲食の守護なれば、くもよみと名く」
御正體は女にして鰻なり

化身
雲よけの
命の御守
護

化身

佛法にては、地藏菩薩、龍王、神王、薬師如来と
現る

五倫五體
の理

以上五柱の神様の御守護ある故に、世に五倫あ
り人に五體あり
六柱目惶根命は、天に在ては未申の方に集る星な
り、世界では風吹別の御守護、人間身の内では呼
吸吹別の御守護なり、方角は未申の方を司り給ふ
御正体は鰈といふ魚なり、至て身薄故に風を司
らしむ、

惶根命の
御守護

御正體は
鰈なり

惶根命と
云名の理

人間の呼吸かぜの道具に使ふたる故に、カシコ
根命と名づくるなり

佛に化身
す

五体ろく
くの理

南無阿彌
陀佛の理

佛法にては大日如來圓光大師と現れ給ふ、
息は風なり、風で吹別るが故に人は物がいへるな
り、
人間身の中は先の五柱の神様と、此六柱目の神様
とが、身の中に入込で御守護下さるが故に、五
をろくくに守ると云ふ
六柱の神様は南無阿彌陀佛といふ、六字の名號な
り、元と元と南無阿彌陀佛と云事は此六柱の神様
に依て出來たるなり
ナムとは煖氣水氣、アとは皮繋、ミとは身の骨な
り、ダとは飲食出入なり、フとは呼吸風なり、ツ

南無阿彌
陀佛を六
柱の神に
配合す

大食天命
の御守護
此物とは
ツクを指

と別ける時は七柱目の神ぎる事なり、凡てひとつ
ふたつみつと云てつと云事は切れ語なり
南無阿彌陀佛と云は、西方にあるにあらずして、
六柱の神様なり六柱の神様は人間身の中を御守護
下さるが故に、人間の身が直に南無阿彌陀佛の六
字なり此理を以て身の内六大と云ふ、火と水とは
一の神、風より外に神はあるまい、呼吸は風なり
風は神なり、如何なる物でも吹放つ、嗚呼神の御
威勢盛なる哉、
七柱目大食天命は、天に在ては丑寅の方に集る星
なり、此物は食すると毒に當て死するが故に、生

御正体
立腹の理

大食天命
の化身

大斗の辨
命の御守

死出直の時の縁を切る御守護、方角は丑寅を司り
給ふ

御正體はフグと云ふ魚なり、フグと云魚は、常に
大食して腹ふくれて居るが故に、人の腹を立て顔
色の變りたるを、フクレ面と云ふ、大食すれば壽
命が短縮なるが故に、大食天命と名く

佛法にては、虚空藏菩薩、鬼子母神、妙見菩薩、
鬼門金神と現れ給ふ

八柱目大斗乃辨命、天に在ては宵の明星と現れ、
人間身の中では、生るゝ時母の胎内より引出の御
守護、世界では種物粒氣新芽引出の御守護、方角

御正体

苦勞の理

化身

は酉の方を司り給ふ

御正體は男にて黒くちなななり、勢ひ甚強く、突て
も引ても切れぬ物なれば、凡て引出の守護と成し、
凡て物を引出すには、たづなが必用なり、たづな
は、蛇に似て居るあり

重量物を引出す時は汗を流して苦勞したといふ、
其くろろご云は、クロ蛇のくろご云理より來たる
なり、凡て骨身を惜ずして働きたる人を慰るに、

御苦勞ご云は皆此理より出でたるなり、
佛法にては不動明王、弘法大師役の行者を現れ給
ふ

九柱目伊弉諾命、天に在ては天の川の七夕様と現れ、人間生るゝ時の種苗代と成り給ふ、方角は世界あまのくにの中央あたりのを司り給ふ

御正体は、ギン魚ぎんぎょ、又は人魚にんぎょと云ふ魚類なり、人間の顔かほにて鱗うろこなし、肌膚くわふも又人間にんげんに同く、心こころは誠に正直まことなるも故ゆゑに人間の種たねに使つかはれたるなり、男おとこ躰たはにして人間にんげんの父ちちなり、其証據しやうこには伊勢いせの内宮うちみや天照大神あまてらすかみ宮様みやさまと同体どうたいなり

十柱目伊弉册命いせさくのみことは、天あまに在ては天の川あまのがはへだての七夕せちやひさんさんと云星いほほしなり、女神めがみ様さまにして人間にんげんの種苗代たねなごしろと成り給ふ、則すなはち人間にんげんの母親ははなり、方角あたかは世界の中央あたりの

を司り給ふ
御正躰みまがみは白蛇しろくまなり、人間の顔かほ、人間の肌はだにして鱗うろこなし、至いたて心正直こころまことなるも故ゆゑに、人間の種苗代たねなごしろと成し給ふ、其証據しやうこには伊勢いせ外宮そとみや豊受大神とようけかみ宮みやは此神様こゝかみさまなり

此十柱の神様かみさまが世界よこを拵しらへ人間身にんげんみの中なかを守り給ふ証據しやうこには、人間の手の指ゆびは十本じゅうほんあり、右みぎの親指おやゆびは面足命おももとみ即日様ひごとさまのシルシルしなり、左ひだりの親指おやゆびは國常立命くにとこたてのみこと即ち月様つきさまのシルシルしなり、右みぎの人指ひとゆびし指ゆびは國狹土命くにさつちのみこと左ひだりの人ひとさし指ゆびは月讀命つきよみのみこと（以下順を追て知れ）なり
斯かの如ごとく十柱じゅうちゆうの神かみが人間にんげんを守護まもする証據しやうこに手に十

夫婦の別

子に病白
血長血等
を病む因

ミイ様は
度皮リク
も男に縁
うてし

本の指あり因て手は證據なりと知らしめんが爲に、
天照皇大神宮、テーシヨウユウダイシングウと名
け給たるなり

神様常に婦人に諭し給は、此世は地と天とをかた
ごりて夫婦を拵らへたるなれば、女は地で男は天

である、故に女は何處迄も男に隨はねば成らぬ、
夜分閨房に於ては、女はいやでも男の言通に任さ

ねばならぬ、若し男の意志に隨はぬ時は、其天罰
として子宮となり白血長血となり、遂に男と交合

が出来ぬ様になる、死で未來幾度生れ變ても、男
に縁が薄くなる、現伊弉册命は始め人間宿し込の

ミイ様の
七夕さん
に生るゝ
の因縁

ミイ様は
中將姫小
野小町中
山美支に
生れ望の
理

時、伊弉諾命を嫌て逃げたる、其報として天の川

隔ての七夕と生れ、一年三百六十日の間に七月七

日に一度しか遇へぬ、其も雨が三滴降る時は、忽

ち洪水汎濫して相逢事が出来ぬ様になる、且つ又

中將姫と産て一生男の肌膚知らず、復小野小町と

生て人に穴なしと云はれて、遂に獨身に終る、
前川半七の娘と生て、中山善兵衛の妻と成ては、
良人善兵衛を下婢のカノに横取せられ、剩へ毒藥
をさへ食されて殆ど死に瀕したる事あり、如斯未
來永却男に縁薄くなるから、必ず閨門に於ては男
の云條に従はねば成らぬぞと仰せらる、

身の内へ
神様へ込
の理

木や金や
紙に
神は宿れ

神様常に教諭して宣く、人間身の中は神の貸物なり、故に人間の身は直に神なり、人間の身の中より外に神と云もの更になし、世界一列は紙や木の切れ、泥土や金を神佛として崇むれど、怎麼にもそんな物の中に神が入込で守護する事が出来ぬ、故に人間の身の中へ神が入込で守護をするなり、このたびは天理王命當年八十六才（此書は御教祖八十六才の時に御教祖の口づから仰せらるゝ事を御側の者の筆記せしなり）になる美支は心正直なるを神が見澄てその胎内を神の宿として入込四十六年以前より、今にかりもの八埃因縁の道を説き

教祖に神
の入込の
理

地場
に神
の名を付
た理

人間に宿
あるの理

居るなり、尤も美支の魂は元々伊弉册命の生れ變にして、人間宿込の時は月日より世界出来あがりたる後は、世界中より世界第一の祠に崇させ、榮華を充分にさしてやらふと云ふ約束なるが故に、其胎内に月日が入込て、甘露臺の地名に天理王命と云ふ名を付け、萬人の偈仰を受さするなり、地所に神の名を付たは、人間宿込の時の地場であるからと仰らる、人間の身は神の借物なれば、病煩はなき筈なれど八の心間違があるからである、八の心間違とは、ほしい、をしひ、かわい、にくひ、うらみ、はら

だち、よくにこうまん
十五歳迄は親の埃、十五すぎたら其兒の罪、病氣
わかしに、不事災難、皆埃なり、又神の意見立服
なりと仰せらる
此たびの神樂勤は、國常立命になる者は龍の面を
被り、面足命になる者は大蛇の面を被り、其外シ
ヤナホコはシヤナホコ、カレはカレの面を被りて
舞はしめ、其陽氣遊を神が見て喜ぶなりと仰らる
此勤の人数は八十一人なり此世の元は夜の九時よ
り出来たるなれば、數の始は九なり、即九々八十
一人の勤人数も必要なり

神樂勤をしてなぜ人の病氣が救かるか云に、元
來、神が人間を造る目的が人間に陽氣遊をさせて
御自分も其を見て、樂まんこの御つもりなるが故
に、お手振をする者が十社の神様の元の御正體の
まゝの面を被て舞が故に非常に神の心も勇で其依
て人の病が救かるなりと仰せらる
勤をするに鳴物音楽に九の道具を用るは、先にも
ある如く此世は夜の九つ時より始たるを以てなり
此世は凡て九の理を以てせめたもの、依て九の土、
九の世界と云ふ
三々九度のお授にて病氣を癒すは、神の此度天降

三々九度の御授を用る理

此度は月日直々の御授

三々九度の御授

たる土産なり、今迄は八卦八段醫者藥拜祈禱で助けたれど、九億九万九千九百九十九年の年間満たるを以て、其らの効能を取上げて、此度は月日直々の御救助なり
今迄は丁稚番頭の取次で救助したなれど、今よりは主人（月日の事）直々に逢て救助てやるから、靈験殊に著きなりと仰らる
あしき拂へ助け給へ天理王命と、三度宛三度唱へるは、始の三度は三つ身に着て離れぬ、次の三度は先の三度と合せて六つろづくに守の理、次の三度で九つ苦がなくなるの理なりと仰せらる

金米糖三粒用るの理
金米糖にわまかあるの理

おびやはよその守

御供に金米糖を三粒入てあるは、矢張三つ身に着て離れぬ理なり、金米糖に澤山の角あるは、人間の氣隨傲慢の角を取れと云のお諭なり
金米糖に砂糖の甘味あるは、親さごうと云本部の御地場を忘れなご云事、あまみは人間にも砂糖の如く、柔か優しき甘味をもてと云お諭なり

ふしぎなたすけは、このごころ、おびやはうそのゆるしだす、痲瘡は足立源四郎の病しごき、ミキの愛子二人を身代に立て救助たる因縁に依て、痲瘡の守を出し、安産の守は御子ハル殿榎本家に嫁せられて難産して死去せられたるを以て、一般婦

百姓にこ
へのさつ
けの効能

竿屋の中
で赤き衣
を着るの
理

人の安産を守護するなりと仰せらる
百姓には肥料のさづけあり、此のをさづけを田畑
に施す時は、糠三合灰三合土三合、都合九合にて
油かす一石に代用するの効能ありと仰せらる、十
ご茲年はこへおかず、充分物をつくりごり、やれ
たのもしや、ありがたや
入牢するに赤き衣を着せるは、あかく照す月日の
恩を知れと云事なり
借て話はあご戻りをするが、神様は御氣にむいた
時でなければ御話を成されて居ても、中止を成さ
る事がある、或日更に此世の始りだしを御話なさ

ま一際ほ
三年三月
四胎の事
長谷奈良
七里は七
日間産
む
産後七十
五日を忌
明と云ふ

るに、伊弉諾命にシヤナホコを道具として仕込、
其に國常立命入込、伊弉册命に龜を女の陰門とし
て仕込其に面足命入込、九億九万九千九百九十九
人の人數を、南無くと云て、三日三夜に宿込、
三年三月の間懐胎して、産降し、先始に長谷奈良
七里の間を七日七夜に産降し、残る大和を四日か
りりて産降し、これで十一日十一たれと云ふ
山城伊賀河内三ヶ國を十九日かりりて産降し、是
で産後三十日を半をびせ云ふ、残る今の日本國を
四十五日かりりて産降し、都合七十五日かりりて
事済たるを以て、産後七十五日目を忌あきと云ふ

大和なかに
みかたと
云ふ

人間生れ
四五分
なり

九十九年
目ごとに
生れ變る

長谷奈良七里の間を一番最初に産降し、其交合の
場所、産屋のありし所が、大和國 庄屋敷なるが
故に、大和地方をかみがたご云ふ(神がた)
最初人間の生れた時は身の丈五分にして九十九年
目に三寸五分と成りて死亡し、其より又宿込て此
度は十月ぶりに産降し、九十九年目に四寸と成り
て死亡し、又宿込て十月ぶりに産れ九十九年目に
四寸五分と成て死亡す、此理を以て一官二墓三昧
と云ふ、参り場所あるなり、更に又四寸五分にて
死亡して生れ變り九十九年目に五寸と成りて死亡
するが故に、つまり九十九年目ごとに五分宛生長

女の陰門
及其産所
の四寸に
二寸の理

人間は八
千八度生
れ變る

人間は何
の眞似で
も出来る
半猿猪て
猿一匹變
る
猿の胸に
男五人女
五人

して、身の丈五尺になる時ニツヨリ笑ふ、其のニ
ツヨリ笑た理を以て、人間の生れ出る、母の陰門
も四寸に二寸なり、死て墓所で焼かる、焼場も
四尺に二尺、四間に二間なり、
其より人間が猿と成り虎となり鳥となり畜生とな
り、あらゆる禽獸蟲魚に生れ變る事、實に八千八
度なり、故に人間は何の眞似でも出来るなり、此
生れ變る年限は九億九万九千九百九十九年なり、
此年限満た時は世界に動物は一つもなき様になる
唯猿一匹のみ残る、其猿は國狭土命なり、此猿の
體内に男五人と女五人と十人宛生れ出し、此人間

身の長八寸に成るの時

身の丈三尺に成りたる時

も五分から生て五分五分と段々生長して八寸に成たる時、ごろ水高底が出来、一尺八寸に成たる時、兒が親となりて元の人數生揃へ、水土かわりて、是より男も女も一人宛生て三尺迄成長した時に大地海山かわりかけ、人間物の云ひかけけるなり、其の理に依て今も猶三才の頃より物を云かけけるなり、五尺に成る迄は人間の生長に應じて天地海山速にわかり、人間も九億九万九千九百九十九の者が、日本に生れ、外國に産れ、天竺に生れ、又九億九十年の間は水中の住居、陸上の住居は九万九千九百九十年なり、此内六千年の間人間の身の中へ神が

九億九年は水中の住居

本部に甘露臺を置の理

天神七代

入込で、なにかの事を教へたり、其譯を誰も知りたる者はない、其筈や今迄神も直々に教た事がないからである、

本部に甘露臺を置譯は、人間生れ出の元の地場なればなり、其の甘露臺の上に平鉢をのせ、其に天から甘露ふる時は、人間其を頂きさへすれば盲者は眼は明き、瞽者は足立ち、病ず衰らず死なぬ様になる

國常立命 面足命 國狹土命 月讀命 雲夜見命
惶根命 大食天命 以上を天神七代と云ふ
國狹土命 月讀命 雲讀命 惶根命 大食天命

是を地神五代ニ云ふ

南無天理はぶつなり、此理を以て七條の袈裟ニ云ふ、大斗辨命は、八月彼岸八方神、伊弉那岐伊弉

那美命此の十柱の神十月十夜ニ云ふ

八柱目大戸之辨命の正體は黒蛇なり、天竺にては

不動明王と現る、此田畑の神なり、野の神なり、

御眞言は、のうまく、さんまだ、ばさらだ、せん

ごまかるしやだ、そわたや、うんたらたかかんまん

ごいふ、房頭袈裟衣を掛けて殊勝氣に珠數をつまぐ

るも、此眞言のわけは知るまい、ノウマクとは野

へ種を蒔くと云事なり、サンマンダとは、一粒万

大斗の辨命は不動明王なり
不動の眞言
ノウマク
サンマン
ダのわけ

バサラダ
とは如何

センドイ
カロナヤ
ダとは如何

ソマヤ
ウンタフ
とは如何

カンヤン
とは如何

カナン
とは如何

倍の義、即ち野に種を蒔たらさんまんだと澤山に

ひろがるの理、バサラダとは秋に成收穫たならば、

あごはさらになる理、センドイマカロナヤダとは

麥米が商賣人の手に渡り店に出る時は、買人がつ

いてせんご、ねたんをまけるごいふ、ソワタヤご

は、無茶にねざられては、そばが倒れるなり、ウ

ンタフタカシマシごは、田地よりうんごだからを

ごつたなら、雨が降るも風が吹こうも、何もかん

まんでないかご云事なり

をわたり

昭和四十八年十一月十四日
八木佐吉代

明治三十六年六月二十日印刷
明治三十六年六月廿五日發行

(定價金卅五錢)

編者 神代古記出版所

右代表者 貞木天涯

發行兼印刷者 明野富之助

大阪市西區九條町番外二千四百七十二番屋敷

*** 版權 ***
*** 所有 ***

14
1(2)

發行所 神代古記出版所

大阪市西區九條町二番道路五丁目橋西詰